戦国トラベラー

西島 奏多

「うわーすげー」
思わず出た声に全員が振り向く。
「ちょっと猛、静かにしろよ。」
その言葉を聞いて我に返る。
僕は小学6年生の宇和島猛。今日は親友の伊藤大樹と一緒にＶＲ館に来ている。
今いるのは戦国時代エリア。たくさんの武将がまるで目の前にいるように見えた。
「戦国時代ってすごいな。俺も戦国時代に生まれたかったな～。」
「馬鹿言うな。戦国時代は危険なんだぞ。戦死者が出るのは当たり前。それにな…。」
「わかったわかったよ！くそー夢位見せてくれたっていいじゃないか。」
大樹は物知りだけど、話し出したら止まらないところが玉にきずだ。
「ぶーひどいやひどい…。」
やと言おうとした時、きれいな水が見えた。
「へーこれもＶＲなのかすごいなー。」
ぼんやり見ていると突然引っ張られるような感覚がした。
「え、なっなんだ！」
引っ張られる！そう思った瞬間がしっと足を掴まれた。

「大丈夫か猛！」
大樹が間一髪で足を掴んでくれた。
「大樹、ありが…。」
しかし気が緩んだのか大樹も一緒に引き込まれてしまった。
うわ！と言った瞬間どこかに放り出された。
「いててて…ん？」
気配を感じて上を見上げると、そこには怒った顔をした男の人がいた。
「何だあお前は!!」
「ぎゃー!?」
慌てて逃げだすと追ってきた。
「大樹、どこー！」
叫んでも返事はない。どこだどこだと探していると、男の人と一緒に馬に乗る大樹を見つけた。
「大樹ー！」
と叫んでも反応はない。すると。
「みーつーけーたーぞー！」
さっきの男の人が僕の背後にいた。

今度はさすがに逃げ切れず捕まってしまった。
その人にしばらく運ばれると男の人が、
「勝頼様、怪しいものを捕らえてきました。」
と言って僕を前に出した。
勝頼と呼ばれた人は、
「そうかよくやった。」
とだけ話した。
「勝頼ってもしかして、武田勝頼⁉」
驚いて声が出た瞬間、
「こら！無礼だぞ。勝頼様と呼べ。勝頼様は甲斐の虎と呼ばれた信玄様のご子息なのだぞ！」
と男の人が言うと、
「次郎、まあよいではないか。」
と勝頼さんが言った。
「へ―あなた次郎っていうんですね。」
と言うと、次郎さんは少し顔を赤くしてそっぽを向いた。
「ところで、勝頼さんは何をやっているんですか。」

と聞くと、
「見ての通り戦だが…それより、君はどこから来たのだ？見慣れない服装をしているし。」
突然話しかけられてびっくりしたけれども、応えようとしたその時、かなり慌てた様子で男の人が駆け込んできた。
「勝頼さま、わが軍の城が攻撃されています。援軍をお願いします。」
そういうと座り込んだ。すると勝頼さんは、
「いや、あそこの者たちに頑張ってもらおう。」
すると伝えに来ていた男の人が驚いたような表情をして言った。
「殿！今その者たちがやられそうになっているから伝えに来たのです。もし援軍が来なかったら城も、城に居るものも…。」
その言葉にかぶせるようにして勝頼さんが言った。
「いいか！これ以上私に背くようなら即刻処刑だ！わかったな。」
伝えに来た男の人は悔しそうな表情をしていたけれど、やがて
「わかりました…。」
とだけ言うとさって行った。
「すまぬ、もう一度聞こう。君はどこから…。」

「そんなことより、いいのですか、援軍を送らなくて。」
「構わぬ。」
そんな返答に次郎さんはついに怒った。
「殿、いい加減にしてください。あなたは勝手すぎます。もし援軍を本当に送らないなら私は軍を出ていきます。」
だけど勝頼さんは、
「…構わん。」
と、一言だけ言った。だけどその顔はどこか寂しげに見えたような気がした。
すると次郎さんは俺を担ぐと、森の中へ走っていった。
「ちょ、次郎さん本当に抜けちゃうの？」
「当たり前だ。あの人にはもう、うんざりだ。」
そんな会話を繰り返しながらある村に着いた。
「次郎さんここは？」
と聞くと、
「俺の故郷の村だ。」
と次郎さんが答えてくれた。

村に行くとたくさんの人が出迎えてくれた。
二日間くらい過ごした時、ふと聞きたい事があって次郎さんに聞いてみた。
「次郎さん、僕が落ちてきた時、何か不思議なものはあった？」
そう聞くと、そういえば…と何かのかけらを取り出してくれた。
「お前が落ちてくるとき、これも落ちてきたんだ。とても神々しい光をまとっていたから大切にとっていたのだ。」
そういって見せてくれたのは割れたガラスの破片のようなのものだった。
「へ―確かにきれい。そういえば大樹も同じようなもの持っていた気が…。」
「大樹、とは？」
「僕の友達だよ。一緒に来たんだけれどはぐれちゃって。」
「そうか、じゃっその友達を探せばいいんだな。」
その言葉を聞いてはっとした。
「そうだ、探して帰らないと。」
自然と声を出していた。
「そうと決まれば出発だ！」
次郎さんがそう言って旅じたくを始めた。

しかし、旅に出てからが長かった。大樹を見た、と言う人がいなかったからだ。三日探してようやく知っている人が見つかった。その人が言うにはある武士が連れていたというのだ。その後、その武将がいる場所を教えてもらった。

そしてまた二日ほど歩き、何とかいると言われた場所にたどり着いた。

すると、柵の間から庭で日向ぼっこをしている大樹を見つけた。

その次の瞬間にはもう走り出していた。大樹も僕を見つけて走り出していた。二人で抱き合うと大樹が、

「会えて本当に良かった。」

と言ってくれた。僕も同じ気持ちだった。

何があったのかと聞くと、落ちてきた時、ある武将の人を危ないところで助けたこと、そのことをとても感謝され、家に置いてもらっていたことを話してくれた。

そのことを聞いた後、再び次郎さんの村で過ごしていた。

そんなある日、ある男の人が次郎さんはいないかと聞いてきたので、次郎さんを呼び、話を聞くと、

「勝頼さまが戦で味方がほとんどいなくなり、負けそうだ。」

と教えてくれた。

次郎さんは内心驚いていたそうだったが、

「私はもうあの人とは縁を切りました、関わるつもりはありません。」
そうきっぱりと答えた。
「そっそうか。分かった。」
男の人が帰ろうとすると、
「ちょっと待ってください。」
と呼び止めて、次郎さんに向き直った。
「次郎さん、あなた本当は心配なんじゃないですか。」
そう聞くと、次郎さんは目を見開き、何か言おうとした。けど僕は止まらない！
「僕は、大樹を大切な存在だと思ってる。僕たちと関係は違うかもしれないけれど、次郎さんは勝頼さんのことを大切に思っていたんじゃないの!?」
そう聞くと次郎さんは少し悲しそうな表情をしてから、
「確かに、そうは思っている。しかし、あの方はきっと私のことなど単なる家来としか認識してないのであろう。」
それを聞いた瞬間、僕の口は開いていた。
「いや、勝頼さんは次郎さんのことを大切に思っていると思うよ。だって、次郎さんが軍を抜けるって言った時、勝頼さん、悲しい顔をしてた。」

その言葉を聞いて、次郎さんは頬を叩かれたような顔をしばらくしていた。そして、吹っ切れたのか、こういった。
「行くぞ！勝頼さまを助けるために！」
僕と大樹は、
「おー!!」と叫んだ。
一方そのころ、勝頼軍は危機に陥っていた。
「殿、周りを囲まれました。もう逃げられません。」
その声を聞いて勝頼はがくりと肩を落とし、言った。
「くっすみません、父上、母上、みんな。」
そういって勝頼が自刃しようとした瞬間、
「勝頼様―!!」
という声が響いた。
「まさか次郎か!?」
勝頼が振り向くとそこには次郎と猛、大樹がいた。
「勝頼様、助太刀いたす。」
そういって次郎は敵の兵に切りかかった。

「よっしゃあ俺たちも。」
と言うと、猛と大樹もキックやパンチで戦った。
すると突然二人のポケットが輝きだした。
そして、中に入っていたガラスの破片のようなものが飛び出して、猛のものと、大樹の物とで合体し、ダイヤ型のものになった。
そして、まばゆい光が二人を包み込んだ。
「なっなんだあ。」
と、次郎が声を上げた。
そして光が無くなった頃には二人の姿は消えていた。
「どこへ行ったんだあいつら。」
すると勝頼が、
「何が起きたのかはわからんが敵にスキができた。とにかく逃げるぞ、走れ!!」
「はっはい。」
そう答えて走りながら次郎は二人のことを考え、こう言った。
「元気にしてろよ。」
その頃二人は現代へ戻っていた。

「大樹、今の何だったのか分かる⁉」
「え？えーっと…」
大樹が言う前に猛が、
「タイムトラベルをしたんだよ。つまり僕たち、タイムトラベラーになったんだ。かっこいいだろ‼」
と、目を輝かせながら言った。
「えっそうなのかな。そもそもタイムトラベルってあり得ないし。」
「実際に戦国時代に行っただろ。つまりあり得るんだよ。このかけらだって、証拠としてあるんだよ‼」
そういって出したかけらには、勝頼と次郎の笑い合っている顔が浮かび上がっているように、大樹は見えた。

参考資料

『超ビジュアル！戦国武将大事典』矢部健太郎（監修）　西東社　二〇一六年

戦国（せんごく）トラベラー

2023 年 10 月 28 日　発行

著者　西島（にしじま）　奏多（かなた）

町制施行 60 周年・かんなみ知恵の和館 10 周年記念事業冊子
発行　函南町教育委員会
製本　函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。
（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の
第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。
作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は
著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

小学校六年生の猛は、親友の大樹とＶＲ館に来ていた。ＶＲを楽しんでいると、突然戦国時代にタイムスリップしてしまう。大樹とも離れ離れになった猛は、武田勝頼の前に引き出されて……。